戦時下の明治大学図書館

浮塚　利夫*

本稿は明治大学図書館の戦時下の歩み、とりわけ 1932(昭和 7) 年に開館した新図書館のサービス内容や利用者の動向について概観し、検閲や統制が戦局の拡大とともに一段と強まるなかでの図書館活動と利用者について取り上げる[1]。

1　新図書館の開館

1931(昭和 6) 年の本学創立 50 周年記念事業のひとつに図書館建築が決定し、翌年 3 月に第 1 期工事が完成した。6 月 1 日の開館を目前にした 5 月 26 日に新図書館への移転計画が課員に示され、29 日閲覧室出納台取付工事、30・31 日事務室移転、31 日には新聞閲覧室開室につき夜勤給仕が出仕するまで館員 1 名が交代で夜勤を行うことの回章が出され、慌しい開館準備作業を経て、新図書館が開館した。

5 月 28 日の『駿台新報』に新図書館お披露目の記事が載った。施設面での充実を謳い、閲覧室の各机の下にはスチームが通り、各机の左側に照明が付くなどの設備や、自学自習するためのスペースも設けられたことで、学生は図書館を利用して勉学に励むよう要望が出された。

*うきづか・としお／図書館事務部総合サービス課長

[1]本稿は片山昭蔵「明治大学図書館史」増補改定版（『明治大学図書館報』別冊 8）に負うところが大きい。図書館関連の事柄は明治大学図書館史:1886-1945 年譜編 (『図書の譜』第 9 号) に拠り、利用案内や業務日誌、回章などを参考にした。

図 1: 第 2 期工事完成後の図書館全景

新図書館の総坪数は 480 坪、施設は 1 階事務室、閲覧室、2 階大閲覧室、3 階大ホールにして会議室、地下 1 階書庫と大学院付属研究室である。なお、第 2 期工事は概要が示されていたが実現をみるに至らず、完成すれば 4 倍の規模を誇る幻の図書館であった。(図 1)

新装なった図書館は学生にとっても待望久しいものであった。施設面の充実が図られると、次は開館日の拡大である。11 月に法科学生を中心に図書館は常時開館すべきであるという運動が起こる。その結果、常時開館はできないが年末年始の開館日を拡大することになり、12 月 28・29 日、1 月 6〜8 日が開館することになった。

利用資格、貸出、閲覧室

新図書館のサービス内容については、1935(昭和 10) 年の『明治大学一覧』掲載の図書館規則や『明治大学図書館閲覧案内』よりみてみよう。

図書館の利用者は「教職員、学生、生徒及び校友並びに大学において特に許可したる者」であり、大学において特に許可した者は、利用の「證票」交付料として 1 ヶ月分 3 円、もしくは 6 ヶ月分 10 円を納付することを条件としている。学外者への有料公開はすでに実績があり、帝国教育会附属書籍館からボアソナード文庫を受託した 1908(明治 41) 年に、借覧料 3 銭

で実施していた。

館外貸出は教職員 5 冊以内、大学院学生 3 冊以内、教職員・大学院学生以外の者 2 冊以内、貸出期間は 30 日以内である。

閲覧室は①普通閲覧室 (普通図書を閲覧するところ)、②新聞閲覧室 (新聞・雑誌その他の定期及び逐次刊行物の未製本を閲覧するところ)、③自由閲覧室 (自携「持ち込み」の図書を閲覧するところ)、④特別閲覧室 (①と③をあわせたところ) からなり、③自由閲覧室は自習室のことであろうか。

開館時間、開館日

開館時間は平日午前 8 時より午後 9 時まで。ただし、11 月 1 日より 3 月末日までは午前 8 時半開館。日曜日は午前 9 時より午後 4 時まで。休館日は①祝祭日、本学記念日及び同祝日、②各月末最終日 (館内整備修理等の為)、③夏季休業中 (7 月中旬より 9 月 5 日まで)、④冬季休業中 (12 月 26 日より 1 月 7 日まで)。冬季休業は新図書館開館時に年末 29 日、年始 6 日まで拡大したが、1935(昭和 10) 年には縮小している。夏季休業の期間は長いが、日曜日は開館しており、開館日や開館時間は今日と遜色がないほどである[2]。

なお、予科図書館は昭和 9 年 (1934) に明治大学予科校舎が新築落成すると、6 月に正面玄関脇の講堂を図書室として閲覧業務を開始する。規模は閲覧室 17.5 坪、書庫 17.5 坪、収容人員 80 名、所蔵図書数 8,000 冊である。開館時間は翌年の『予科図書館案内』によれば、平日午前 8 時から午後 8 時まで。日曜は休館となっている。その後、学生数が増加し、予科生一同の寄付金よって図書館建築が進められ、1939(昭和 14) 年秋に新図書館が落成する[3]。

[2]図書館に残る手書きの「文部省報告資料」によれば、1935(昭和 10) 年度の開館日数は 314 日とある。夏季休業期間を考慮すれば開館日数がかなり多い数字である。休業期間中に自習室などを開室していたのだろうか。

[3]『駿台新報』465 号 (1939 年 8 月 10 日) によれば、予科新図書館は建坪 80 坪 333、収容人員 148 名、収容図書 13,000 冊、書庫 13 坪 45、新聞閲覧室 6 坪 25、教員閲覧室 6 坪 26、事務室 6 坪 65

利用状況

図書館の利用状況は『明治大学図書館報』に詳しい。1935(昭和 10) 年 5 月を参考にみてみよう。本館の開館日は 30 日であり、休館日は月末の 1 日のみである。

利　用　統　計　表

	日数	入館者	一日平均	閲覧者	一日平均	閲覧書	一日平均
平日	26	10748	413	6223	239	10159	391
休日	4	395	99	282	71	452	113
計	30	11143	371	6505	217	10611	354
予科	27	1605	59	1003	37	1330	49

利用統計を分析し、利用者の「2 割 8 分ないし 4 割 2 分」が図書を利用しないで座席のみの利用であり、図書館資料を利用しないことを嘆いている。何時の時代も変わらない傾向である。

利用者からの質問には、「案内事項」という項目があり、①高等試験に対する照会 18 件、②カード目録検索法質問 4 件、③新刊図書雑誌備付希望 4 件の事例をあげている。

5 月に多く読まれた図書雑誌は、以下のとおりである。

本館の図書は鳩山著　日本債権法、牧野著　日本刑法、佐藤著　帝国憲法講義、清水著　逐条憲法講義、泉二著　日本刑法論、馬場著　産業経営理論、我妻著　民法総則、河津著　経済原論、赤神著　社会学入門などである。予科の図書はトマス・ハーディ・宮島訳　テス、土田杏林全集第 1 巻、漱石全集第 4 巻、漢籍国字解全書の韓非子、このほか岡倉・井上の英和、片山の独和、小柳の漢和辞典の利用が多い。本館は案内事項にある高等文官試験、あるいは司法官試験などに関係する図書、予科は文学辞典類などの参考図書の利用が多いのが特徴である。

本館の雑誌は『改造』、『中央公論』、『文藝春秋』、『経済往来』、『国家試験』、『セルパン』、『受験界』、『ダイヤモンド』、予科の雑誌は『中央公論』、『改造』、『文藝春秋』などがよく読まれている。

職員組織

1934(昭和 9) 年 5 月 30 日、予科図書室の開室の 4 日前に業務分担のことを記した回章が出されている。そこには庶務会計 2 名、逐次刊行物・目録・蔵書 6 名、閲覧ならびに貸付 (昼間)6 名、(夜間)4 名、予科閲覧事務 2 名で編成され、要員は司書長を加えた 21 名である。

図書館業務や事務組織については、前述の『明治大学一覧』に組織や職務に関する規定が掲載されている。

第 98 条　図書館は左の事務を管掌す。
1 図書の蒐集、整理、保管に関する事項
2 図書の閲覧に関する事項
3 図書館の管理に関する事項

第 99 条　図書館は館長及び委員 10 人を置く
館長の任免は大学之を行ふ
委員は館長の意見を聴き教職員中より大学之を嘱託す
館長及び委員の任期は 2 年とす

第 100 条　図書館に左の職員を置く

1	司書長	参事又は副参事	1 人
2	庶務係	書記	1 人
3	司書	書記	7 人
4	事務員	書記補又は雇員	5 人

第 101 条
館長は図書館の事務を統括する
委員は図書の蒐集、整理その他図書館の事務を掌る

第 102 条
司書長は館長の命を承け図書館の事務を掌る

第 103 条
庶務係は司書長の命を承け図書館に属する事務を処理すべし
司書は司書長の命を承け図書館の事務を処理すべし
事務員は司書長及び館員の指図により事務を執るべし

図書館委員は館長の意見をもとに教職員から選ばれ、大学が任命する仕組みであり、職員組織は司書長→庶務・司書→事務員というラインに基づく業務運営が定められていた。

司書長

司書長の任命は1933(昭和8)年の森本謙蔵が最初である。森本は1926(大正15)年に司書として採用され、1944(昭和19)年に退職するまで、図書館業務に主導的な役割を果たす。片山昭蔵氏が森本司書長について詳しく論じているが、森本の在職期間中には新図書館の開館や新分類法の採用、展示会の開催など、旺盛な図書館活動が行われていた。

年代順に列挙すれば、ABC分類の制定(1929年)、新図書館の開館(1932年)、予科図書館開館(1934年)、明大文庫の創設(1935年)、韓国文庫の創設(1937年)、予科新図書館の開館といろは分類の採用(1939年)などであり、『Catalogue of foreign books』(1931年)、『明治大学和漢図書分類目録』第1冊総記(1934年)、『Special catalogue of foreign books』(1935年)、『備付刊行物一覧』(1936年)、『明治大学図書館増加書目』(月刊、1941年6月〜1942年12月)などの目録類や『明治大学図書館報』(1935年5月〜1936年10月)を刊行している。

図書館主催の展覧会は1940(昭和15)年から1943(昭和18)年に4回開催されている。展覧会は1924(大正13)年11月に関東大震災からの本館復旧の現状を示すために開催して以来のことであり、戦時下に継続して開催したことは特筆すべきことである。

1940(昭和15)年	10月27日〜	予科図書館にて明治大学展覧会(小説之部)の開催。
	11月18日〜	本館にて近世文化展開催。
1942(昭和17)年	11月10日〜	予科図書館にて古事記展を開催し、引き続き本館図書館3階にても開催。
1943(昭和18)年	7月13日〜	予科図書館にて論語展を開催。

そのほか学外にも活動の輪を広げ、本学図書館は東京私立大学図書館協議会の設立に関与し、全国私立大学図書館協議会でも重要な役割を果たす。これらに精力的に係わるのは森本司書長であり、退職後に森本が全国私立大学図書館協議会の名誉会員に推挙されたことはその証である[4]。

[4]私立大学図書館協会編集委員会編『私立大学図書館協会史』1956年。1944(昭和19)年に定年退職した森本は、同年の東京部会では本会発展のために尽力した他の2人の退職職員とともに表彰することが可決され、1946(昭和22)年の第8回総会では名誉会員に推薦された。

遠藤源六図書館長 (1925 年 7 月〜1941 年 3 月)、野田孝明図書館長 (1941 年 4 月〜1949 年 9 月) に仕え、戦時下の図書館を支えた森本司書長の役割は大きい。

2　戦時下の統制

資料を収集し、利用者に提供するという図書館の役割は昔も今も変わらない。だがしかし、検閲や左翼文献の取締りなど、出版や読書に対する統制は厳しく、図書館を取り巻く状況は今日とは大きく異なる。戦時色の強まるなかで図書館の対応についてみてみよう。

閲覧禁止図書

1930(昭和 5) 年 6 月 5 日の回章によれば、「閲覧禁止の文字により好奇的に努めて借覧せんとする者」がいることを理由に、閲覧室備付カードのうち閲覧禁止図書の目録カードを抜き取り、事務室内に別置している。

ABC 分類によれば閲覧禁止図書は「A910」であり、目録カードには閲覧禁止という朱印が右上に押されている。現存する数点の閲覧禁止図書の目録カードには、シュトラッツの『日本人のからだ：生活と芸術にあらわれた』のドイツ語版、フックスの『風俗の歴史』・『エロチック美術の歴史』のドイツ語版がある。これらの図書は風俗安寧の観点から閲覧禁止処置がとられたと推察される。

大学図書館の左翼図書撤去

1934(昭和 9) 年 1 月 18 日の『帝都日々新聞』に「都下大学図書館陸続左翼書類を除去、貸出厳禁、寄贈拒絶も」という記事が掲載された。文部省は各大学図書館に所蔵する左翼思想図書に対する取り扱いについての配慮を促し、各大学でも左翼思想図書の新規購入の中止、寄贈図書の不受理、所蔵図書の貸出禁止の処置をするものとみられ、東大図書館や早大図書館の撤去した例をあげている。

このことに対する本学図書館の対応は明らかではない。この時期の回章には、予科図書室の設置に伴う業務の分担や、横田総長総辞職の顛末に関連するものがあるのみである。

戦争文学の収集

1939(昭和 14) 年 7 月 12 日に戦争文学書籍の収集、亡き友の母校明治大学に書籍 60 冊を寄贈 (『読売新聞』)。明治大学ではこの友情の書籍を礎に事変関係の書籍を収集し、忠霊文庫を設けて記念 (『朝日新聞』) という記事が掲載された。

このことに対応する具体的な記録が図書館には残されていない。忠霊文庫についても不明である。

左翼出版物の提出

1940(昭和 15) 年 7 月 13 日に西神田警察署より左翼出版物の提出を求められ、森本司書長は提出すべきか否かの「伺い」を岸井専務理事に提出した。岸井専務理事からどのような回答を得たのか明らかではないが、「伺い」に図書一冊といえども本学の財産である云々の文言があり、片山は奥村司書長からの聞き伝えとして、「森本司書長は妥協案を考え、提出を拒んだとのことである。利用者用の閲覧目録カードより、該当図書抜き取って、閲覧禁止措置をとり、書庫の一角に配架して、研究者には閲覧できるように配慮した」と記している[5]。

奥村の談話を裏付ける資料ではないが、図書館には製本した「検閲週報」(1 冊) がある。「検閲週報」は図書と雑誌・新聞の禁止処分及び削除処分を受けたリストであり、それぞれ題辞 (号)、発行年月日、巻号、発行地、処分別、処分年月日が記され、毎週図書館に送られてきた。15 巻 6 号にある削除処分の雑誌『南洋経済研究』には上部欄外に朱書きの印しがあり、製本したファイルの後半部分に、該当頁の切り抜きが綴じられていた。また、『近きより』第 7 巻 5 号が西神田警察特別高等係の肩書きをもつ名刺

---

[5]片山昭蔵「明治大学図書館史　増補改定版」(『明治大学図書館報』別冊 8)1996 年. p.28-29。森本司書長の文書は以下のとおり。

「昭和十五年七月十三日
司書長　森本謙蔵
岸井学務理事殿
一　左翼出版物西神田署ニ提出ノ件　今般内務省ニ於テハ左翼出版物ヲ一掃スル為西神田署ヨリ別紙ノ如キ通牒ニ接シ候處図書一冊ト雖モ本学ノ財産ナルヲ以テ本館蔵書中首題関係ノ出版物提出可然哉伺上候　以上」

「別紙の如き通牒」は図書館には残されていないが、東京農林高等学校や駿河台図書館などと同じものが禁止図書リストとともに送られてきたのであろう。

とともに綴じられ、当該雑誌は「検閲週報」15 巻 9 号に禁止処分となっていた。その他にも切り抜きの論文が数点綴じられていることから、禁止処分の雑誌・論文が一般の利用者の眼に触れないような措置がとられたことがわかる。

この年の左翼出版物の取締まりは館種を問わず各図書館に及ぶ。東京高等農林学校の事例をみてみよう。7 月 19 日付文部省教学局長官が出した通牒発企 23 号は発売頒布禁止処分図書の取り扱いに関するもので、貸出、閲覧を禁止し、保管の場所、方法などについて適当な措置を講じるように求め、別冊の綴りに 157 冊の図書名が記されていた。東京高等農林学校では山田盛太郎著『日本資本主義分析』(岩波書店) と野呂栄太郎著『日本資本主義発達史』(岩波書店) の 2 冊を所蔵し、「閲覧及び貸出禁止」として「特別の場所を設けその鍵は校長これを保管」したという[6]。

なお、翌年の第 4 回全国私立大学図書館協議会には、議題として左翼出版物の一斉取締りに対する学校図書館の立場について (国学院大学提出) が取り上げられ、各大学から自館の処置態度についての発言が出され、私大図書館はなるべく共同して同一態度をとることを申し合わせていた。本学からは森本司書長が出席し、図書館の処置内容を説明したと思われる。その他に時局と関係した議題として、教学局選奨図書の閲覧成績について (国学院大学提出)、文部省並に教学局推薦図書の取り扱い及びこれらの利用状況について承りたし (同志社大学提出) などが提出されていた[7]。

また、本学とは至近距離にある東京市立駿河台図書館にも、1940(昭和 15) 年 7 月に左翼出版物取締まりの文書が、157 冊の禁止図書リストとともに送られていた[8]。

3　太平洋戦争と図書館

1941(昭和 16) 年から 1944(昭和 19) 年までの「日誌要略」により、この時期の利用状況を知ることができる。1941(昭和 16) 年 12 月 8 日 (月) に日

[6]東京高等農林学校では 22 日のこの通牒を受付けたという。和田長丈「発売禁止本の行方 昭和 15/1940 年」(大学図書館きのうの話　第 2 回)『大学の図書館』16 巻 1 号 (1997)

[7]私立大学図書館協会編集委員会編『私立大学図書館協会史』1956 年. p.29-

[8]『千代田図書館八十年史』1968 年. p.196-

本がハワイ沖の米国艦隊を攻撃し、日米が戦争状態に突入した。8 日前後の図書館 (本館) の利用状況は次のとおりである。

	自習室入館者	本館入館者	閲覧者	閲覧書
5 日 (金)	258	517	188	281
6 日 (土)	102	263	98	138
7 日 (日)		200	54	97
8 日 (月)	157	255	77	116
9 日 (火)	133	374	129	186
10 日 (水)	93	373	117	179
11 日 (木)	198	698	132	193
12 日 (金)	180	670	125	189

ちなみに 8 日は「帝国、米英に対し戦を宣す (大東亜戦争)」と記述がある。このときから「警戒警報発令解除」「防空訓練」など戦時色が濃厚となり、翌年 12 月 8 日は「大東亜戦争 1 周年記念のため休業」とある。以後、1943(昭和 18) 年には「予科は耐寒強歩行軍のため」(2 月 4 日)、「防空訓練」「山本元帥国葬につき午後 5 時から開館」(6 月 5 日)、「本学学徒出陣壮行式挙行につき休館」(10 月 8 日)、「文部省主催出陣学徒壮行会のため臨時休館」(10 月 21 日)、「防空演習実施のため休業」(11 月 27・28 日)、「予科は勤労奉仕のため休館」(11 月 29 日) となり大学をあげて戦時体制に組み込まれていく。12 月 8 日には「大東亜戦争 2 周年大詔捧戴式並防火訓練のため貸し出しを行わず」とあるが、利用者数は記録されていない。

1949(昭和 19) 年には予科図書館が陸軍陸地測量部に接収され、5 月 8 日に「予科〇〇の為準備、閉館」、9 日「予科図書室引越しのため正午閉館」、10 日「予科図書トラック 5 台にて本館に輸送」と続き、予科図書館の利用統計は 8 日から記録されず、活動休止の状態となる。

書き込み資料

日米が開戦した 1941(昭和 16) 年に宮本和吉著『カント研究』が出版され、本学の蔵書となった。そこには学徒出陣を前に友との惜別を綴った書き込みが残されていた。(図 2)

鐵三郎兄
胸せまる君との別離や悲し
されども今や何をか言はん
国敗れて山河残れど
国敗れて明日はあらじ
見よ
けふも亦　碧深き虚空の・・・・・・
生命かぎり空仰ぎては君を想ひ出そう
われ (われ) の小さな歴史のささやかな記念に
此の一冊を捧げまつる

昭和拾八年学徒出陣のあしたに
晟義　「小池」の印

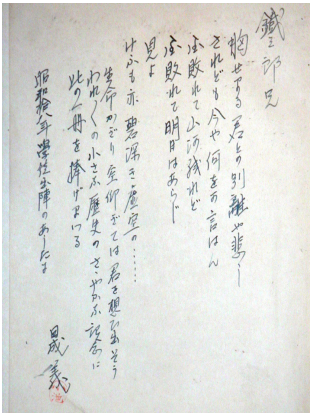

図 2

どのような経緯でこの書き込みがなされたのかわからないが、1943(昭和 18) 年の学徒出陣を前にして書かれたことは明らかであろう。

学生の徴兵は「兵役法」により 26 歳まで徴兵の延期がみとめられていたが、戦争が進むにつれ徴兵猶予は停止された。1941(昭和 16) 年 10 月に政府は、大学・専門学校の在学年限または修業年限の短縮を決定し、繰り上げ卒業を実施した。書き込みにある 1943(昭和 18) 年は第 3 回の繰り上げ卒業が 9 月に実施され、10 月 21 日に文部省と学徒報告団本部の主催による学徒出陣壮行会が明治神宮外苑競技場で開催された。それに先立ち 10 月 8 日、明治大学学徒出陣壮行会が記念館で開催され、この書き込みはそのときの心情を吐露したものと思われる。

学業半ばで戦場に駆り出され、明日への生きる希望を絶たれた悲痛な叫びが、この書き込みから読み取れる。

明治大学学徒出陣壮行会が開催された 10 月 8 日に本館は休館し、予科図書館は開館して 52 名の利用者がいた。学徒出陣壮行会開催の 21 日は臨時休館し、翌 22 日の利用者は本館 140 名、予科 25 名である。学生仲間が次々と戦場に駆り出されるなかで図書館に通い、勉学に励む学生もまた明日がないのである。

空襲下の図書館

1944(昭和 19) 年以降の図書館の状況については奥村が詳しく述べている[9]。職員は奥村と 2、3 人の女性だけとなり、学内には学生もほとんどいなくなり、図書館は疎開の荷造りをしながら、空襲を今か今かと待っているような状態に追い込まれ、閲覧業務もほとんどあるかなきかになっていた。

奥村が司書長に任命されたのは 1944(昭和 19) 年 4 月であり、男性が一人となったのはこのとき以降のことと思われる。また、閲覧業務が休止状態となるのは、本館は 7 月 29 日 (土) の利用者 25 名を最後に 8 月は「書庫整理のため休館」し、その後は記録がないことから、8 月以降であろう。予科図書館は陸軍陸地測量部に接収され、すでに 5 月 8 日から活動を休止していた。

図書の疎開については友人の伝を頼り、甲府の山中の倉庫、相模原の農家、大学の八幡山グランドの一隅にある小屋などに分散した。貴重資料は岩下篤廣元館長 (1969 年〜1971 年) の郷里山梨県韮崎の土蔵を借用して 2 回にわけて疎開し、和漢書・和本類は八幡山グランドの小屋に 3 回にわけて牛車で搬送したという。

岩下篤廣元館長は 1928(昭和 3) 年から 1937(昭和 12) 年まで図書館に勤務し、その後教務課などを経て、1953(昭和 23) 年に政治経済学部専門部教授となり、1969(昭和 44) 年に図書館長に就任する。貴重な文献の充実に努めた図書館勤務の経験から貴重資料の疎開に尽力され、今日まで多くの貴重資料が残されたのも、こうした大学人の支えがあればこそである[10]。

この時期図書も闇値となり、この闇値もお添え物がないと売ってくれないという状態が続き、資料の購入もリュックサックを担いで買いに出かけた。そのような思いをして手に入れた図書も空襲で灰塵に帰すよりはと、勤労動員に出かけている各地の職場に図書を送ることを始めた。関東大震災で図書館が焼失し、貸出中の資料のみが残されたという経験からであろ

---

[9]奥村藤嗣「私立大学図書館の終戦前後」(『図書館雑誌』Vol.59、No.8)。
1944(昭和 19) 年以降の図書館の状況を伝える資料は少ない。奥村の記述は貴重な証言であり、「空襲下の図書館」は奥村の記述をもとにし、それを補記するものとして片山の論考を参考にした。

[10]『政経論叢』第 41 巻 3・4 号は「岩下篤廣博士古稀記念論文集」。喜多登「惜陽光過賦」p.362-3 や略年歴を参照。

うが、奥村の英断であろう。

奥村はまた、1945(昭和 20) 年に市ヶ谷の参謀本部が駿河台校舎の半分を占領したことに触れている。空襲で近隣の龍名館が灰塵に帰し、大学にも危険が迫ったときに参謀本部の兵隊がプールの水を内部からかけ続けたことや、屋上に落ちてきた焼夷弾を下に落としたのも彼らのおかげであると述べている。

大学周辺は 2 月 25 日の空襲 (この空襲では須田町神保町などを中心に神田区で 9,200 戸が焼失)、3 月 10 日の東京大空襲 (この空襲では外神田一帯と東神田を中心に約 5,000 戸が焼失) で甚大な被害を受けた。本学は 4 月 13 日の空襲により記念館、本館校舎などを破損し、体育館を大破、猿楽町の女子校舎を全焼したが、図書館は無事であった。その後も空襲が続き神田区はほとんど全域が焦土と化した[11] 。

東京大空襲から 5 ヵ月後の 8 月 15 日、総長室わきの会議室に職員が集まり、玉音放送を聞いて終戦を迎えた。この日出勤していた職員は 23 人であった[12] 。

[11] 『千代田区史』中巻 1960. p.805-。『明治大学百年史』第 4 巻 1994. p.363-
[12] 『明治大学百年史』第 4 巻 1994. p.365